

# 留学の現場から

## 留学のすすめ

宮城 柚希

(みやぎ ゆうき)

人文学部 4年

大学3年の後期から10ヶ月間フランスのリール大学に留学した。初めての海外旅行で訪れた10歳のときからずっとフランスは憧れの国で、いつか留学したいと思っていた。

前期は大学附属のDEFIというフランス語の語学学校に通った。外国語としてのフランス語を学ぶ多国籍のクラスで、毎日楽しく語学学習に励んだ。クラスメイトの多くは英語が通じないため、みんなカタコトのフランス語でコミュニケーションを取っていた。

後期からは大学の授業の中から関心のあるものを自由に選択した。英語で教わる英文法の授業、フランス語で教わる美術史や日本文学の授業など。体育の授業ではアーチェリーを選択した。

大学に日本語学科があったため、放課後は日仏の学生が交流できるイベントや留学生向けのイベントに参加した。人見知りの私でも、日本にいた時よりも多くの人と友達になれた。

休日は異文化交流のイベントに参加したり、アルバイトをしたりと様々な体験をすることができた。

ありきたりだけれど、留学を通して「世界は広い」ことを実感した。戦争などで逃げてきたウクライナ人、アフガニスタン人、シリア人の友達ができ、海外ニュースの世界を目前にした。また、自身が外国で外国人として生活したことで、日本に住む外国人の人権問題に思い至ることもできた。

留学はこれまでは意識していなかった世界が見えてきて、それを自分事化できる貴重な経験だと思う。少しでも留学に興味がある人は、目の前にあるチャンスをしっかり掴み取ってほしい。



語学学校の授業最終日に先生・クラスメイトと記念撮影

## 言語

騰 暁鳳

(トウ ギョウホウ)

人文科学研究科修士課程2年

来日する前、ある中国人の日本語の先生が、二十年前の留学時代の話をしてくれた。誕生日にろうそくを買おうとスーパーに行ったが見つからず、「ろうそく」という日本語が分からず、泣いてしまったというエピソードだ。当時はどこか遠い世界の話のように感じていたが、実際に日本に来て、言葉が通じないつらさと不便さを痛感した。言葉の壁は人の一步をためらわせるが、言葉そのものは、人と人を静かに結びつける力を持っていると今は思う。

日本語には音読みと訓読みがあり、多くの漢字が中国語と発音も意味も似ている。最近韓国映画をよく観ているのだが、その中で韓国語にも多くの漢字語があることに気づき、日本語との発音の類似性に驚かされた。そして改めて、日本語と中国語の音の近さを感じた。例えば「電話」は、日本語では「でんわ」、韓国語では「jeonhwa」、中国語では「diànhuà」で、三言語とも非常に似ている。

確かに、ひらがな・カタカナやハングルは、初めて触れる中国人にとっては暗号のように感じられるかもしれない。だが、その根底には共通点があり、それに気づくたびに中・日・韓のつながりを感じる。緊張感が溢れている国際政治とは異なり、言語を通して見える三国の関係は、静かで温かい“根”のようだ。

最近、日本のネットで流行っている「漢字と英語をミックスした文章」を見かけて、とても面白いと感じた。日本人の友達も、私のような中国人も読めて、中・日・英の三つの言語が融合した、新しい表現が生まれていると思う。

日本人の皆さん、これから中国からの留学生と出会ったら、昔のように「漢文」でコミュニケーションしようとするのではなく、ぜひこの新しいスタイルで気軽に声をかけてみてください！



実家にある『和製漢語』の本